

## 語彙 (理論・現代)

### 一

昭和五十年代の初め、ある意味論関係の新刊翻訳書の帯は、ひときわ、目を引くものであったことを思い起こす。「意味は構造化できるか」との見出しのもとに、「ソシュール以後の意味論の主題は、音韻論・形態論・統辞論において見事に展開された構造モデルが、意味論においても可能かという問いかけである」とあり、最終文には「言語学の最後の分野である意味論に関心の高まる今日」とあった。当時まだ研究者としては出発したばかりで、自らの研究領域を確信をもっては定めかねていた筆者は、つよい刺激を受けたものである。そして以来十年の経緯は、周知の通り、国語学界においても、意味・語彙の領域についてのさまざまな意欲的な研究が積み重ねられてきた。この間、柴田武、國廣哲彌氏らの「ことばの意味」1〜3 (平凡社、昭51・9〜昭57・5)、森田良行氏の「基礎日本語」1〜3 (角川書店、昭52・10〜昭59・10)、日本方言研究会・柴田武編「日本方言の語彙」(三省堂、昭53・10)、室山敏昭氏の一連の方言生活語彙学的研究、平山輝男氏を代表とする全国方言基礎語彙の研究、前田富祺氏らの国語語彙史研究会の活動、等々が、先導的・主導的役割を果

たし、それらにあい呼応する多くの研究が続いた。語彙の研究部門は、まだ不確かな、その体系や構造や特質を明らかにしようとする課題意識が共通するが故に、古典語と現代語、書記言語と音声言語、共通語と地域言語、等々の、それぞれの対象の枠を越えて、相互に、研究上のコミュニケーションを求めている領域であると言えよう。そのことはまた、この部門の研究が俄に活性化した一因でもあると思う。

近年の語彙研究の状況を右のように概観したうえで、昭和59・60年度の動向をみるに、ここ十年の加速度的とも言うべき研究開拓のめまぐるしさが一段落したかのような一種の落ち着きを覚える。それは、一つには、戦後の語彙研究の集大成とも言うべき佐藤喜代治編「講座日本語の語彙」(全11巻別巻1 明治書院)が昭和58年11月に完結した後を受けて、今期、たとえば森田良行氏の「基礎日本語」シリーズが完結したことや前田富祺氏の大著「国語語彙史研究」などの刊行をみて、この分野の先導的役割を担ってきた人びとの研究が確かな一段階を踏んだことからくる印象でもあろうし、また一つには、語彙研究もじゅうぶん裾野が広がり、すでに多くの対象に多くの研究者が取り組んでいて、今や研究の開拓期から展開期に入っ

吉田 則 夫

ている状況からくる印象でもあろう。以下、展開期を迎えていると思われる語彙研究のさまざまなありようを、与えられた紙幅の中で概観してみる。(なお、明治期の文献を対象としたもの、及び方言を対象としたものは原則として本稿の対象外とした。)

## 二

森田良行氏の「基礎日本語3」(角川書店、昭59・10)が刊行され、第一巻から七年を経て全三巻が完結した。本巻では派生義や比喩的な意味をもつ名詞を中心に、動詞・形容詞・形容動詞・副詞が補充され、感動詞・助辞・接辞の類も含まれている。本書の記述方法の基本方針はすでに前著において明快に示されているのでここにくり返すことはしない。本書の性格について、著者は、いわゆる世間一般の類義語辞典とは異なり、基礎的な和語について文法的観点から語義の実態をとらえることをめざした「意味・用法の記述書」であると説明する。文法・表現・語彙・意味の各領域をダイナミックかつトータルに研究しようとする森田氏の研究姿勢の結実と言えよう。なお、巻末には全三巻にとりあげられた一、七三〇余語の五十音順総合索引が付されている。

藤原与一・磯貝英夫・室山敏昭編「表現類語辞典」(東京堂出版、昭60・3)は、類書とは異なる特長をもつが、とりわけ近代文学研究畑の人たちが、近代・現代文学作品の使用例を豊富に求めて記述している点が特筆される。類語間のニュアンスは個性的な文芸作品の中の語を見つめることによって、端的に、的確な把握ができるはずだからである。たとえば「あざけり・嘲笑・愚弄・翻弄・嘲弄・からかい」、「いきなり・にわかに・・やにわに・ふいと・突然・突如・

忽然・出し抜け・唐突」など、体・用・相にわたる一、二・三二の類義語のグループが見出し語の五十音順に配列されている。巻末索引から検索が可能となっている八、三六一語の総語彙量は類書をはるかに凌いでいる。今期の語彙・意味研究の大きな成果の一つである。類語辞典と銘打つもう一つのものに大野晋・浜西正人「類語国語辞典」(角川書店、昭60・1)がある。同じ著者によって四年前に刊行された「角川類語新辞典」の体裁・内容をほぼ踏襲しており、タイトルが変わったと判断してよい。この場合の類語は広義に解釈すべきもので、「分類国語辞典」としての実質をそなえており、約六万二千語を収録している。九九九の見出し語も、またそこに彙集されている一つひとつの単語も、徹底的に五十音順を拒否してひたすら単語相互の意味関係によって配列し、収録語のすべては巻頭の五十音順索引から検索するようになっていいる。現行の五十音引きの国語辞典とは異なる、国語語彙辞典ないし分類国語辞典の形態は、ほぼこの形に近いのではないかと思わせるものがある。

国立国語研究所「高校教科書の語彙調査Ⅱ」(秀英出版、昭59・3)は国研報告76に続くものである。同じく理科・社会の教科書を対象としたW単位(語)の五十音順語彙表と度数順語彙表とで、五百頁近い書冊の九割以上を占めているので、データ集と言うべきであろう。本研究の目的には多くの期待が寄せられているはずだが、一読者としては膨大な資料の山に圧倒される思いである。分析編が待望される。なお、「高校教科書文脈付き用語索引」(国立国語研究所言語処理データ集1)がマイクロフィッシュによって刊行されたことを付言しておく。

国立国語研究所「国定読本用語総覧1」(三省堂、昭60・11)は国定

読本の第一期にあたる明治三十七年から使用された『尋常小学読本』（いわゆるイエシ読本）を対象としている。用語総覧とは、当該文献にあるすべての語についての用例を示すもので、国語国文学の分野では、あまりその名称が一般化していないコンコダンス（Concordance）のことである。この用語総覧では、見出し語数三、八六五、用例数三二、四一〇が登録されている。本書については、刊行と同時に新聞各紙に大段的に報道されたこと、すでに数刷の版を重ねていることにも明らかな通り、学界はもちろん世間の大きな関心が集められた。

藤原鎮男・藤原讓・大塚明郎『文部省学術用語集統合リスト』（特定研究総括班、昭59・3）は特定研究「情報化社会における言語の標準化」の語彙方面の成果の一つである。動物から天文学に及ぶ全二十三の分野の学術用語約九万語が日本語と英語で統合リスト化されたもので、学界に裨益するところが大きい。

### 三

現代語の語彙研究の中心課題の一つに、基本語彙の考察とその設定がある。すでにかんがりの研究が蓄積されており、今期もまた多くの論考が付け加えられた。まず、『日本語学』三二二（昭59・2）の基本語彙の特集では、阪本一郎、林四郎、森岡健二の基本語彙論ないし基本語彙観についての論考が配置された後、田中章夫「基本語彙と基本語」、甲斐睦朗「国語教育の基本語彙——小学校の国語科教育の観点から——」、高野文雄・鳥海剛「専門分野の基本語彙」、宮地裕「基本語彙・慣用語・複合語」、浜本純逸「ソ連の基本語彙」、大槻和夫「東

ドイツにおける学習基本語彙」の全十編が収載されていて壮観であ

る。国語教育及び日本語教育の場でも切実に求められている課題であり、今後ますます、どの分野よりも、国語学、国語教育学、日本語教育学の三者の提携が必要とされるであろう。とくに教育基本語彙に関しては、周知の阪本一郎『教育基本語彙』（牧書店、昭33・8）があり、これまで国語教育の研究と実践に活用されてきた役割と頻度は、国語学における「分類語彙表」とまさに好一対と並び称されて良いのではないかと思う。それがこのたび四半世紀を経て「新教育基本語彙」（学芸図書、昭59・1）に改版された。総語彙量、一九、二七一語を小学校低学年代階A1・A2、同高学年代階B1・B3、中学校段階C1・C4に細分化したこと、さらにそれぞれの語を漢字表記した場合の漢字の配当学年を明示したことが前者との大きな改訂点である。神戸大学教育学部語彙指導研究会「教育基本語彙の体系化とその指導方法の究明」（昭和59年度特定研究報告書）（神戸大学教育学部、昭60・3）もこの方面での今期の成果である。感情語彙と論理語彙を統合した教育基本語彙表試案として一、七三六語が選定され、小・低、小・中、小・高、中学の各学年代階別に配当した表が提示された。学校で習得させるべき教育基本語彙を、研究者側の直観を重視し、かなり少量に絞り込んだのは一見識であろう。他にも児童の側に主体性を置いた学習基本語彙に、中央教育研究所「学習基本語彙」（同所刊、昭59・9）があり、四、三三三語について学習段階及び用例が記載されている。

国立国語研究所「日本語教育のための基本語彙調査」（秀英出版、昭59・3）は昭和50年度から八年間をかけて行ってきた研究がついにとまとったもので、近年の日本語教育熱の高まりの中で待望の刊行である。「分類語彙表」を基本度判定の材料に用い、専門家22名（第

二次選定で数名の出入がある。)による判定方式を採用して、基本語六千及び基本語二千が選定された。本書所収の「日本語教育基本語彙五十音順表」及びその「意味分類体語彙表」からは、ずっしりと重量感が伝わってくる。国立国語研究所日本語教育センター設置後の大きな成果の一つに数えられよう。

前田富祺「語彙教育の基礎」(『応用言語学講座1、日本語の教育』明治書院、昭60・3)は、「応用言語学講座」という企画にこの同氏を配置して初めて得られる論考で、語彙教育の本質と展望が述べられている。同書の進藤咲子「国語語彙のとらえ方」は、国語の語彙について、頻度・意味構造・獲得の三つの観点からの捉え方を解説したもの。また、日本語教育の立場での語彙及び語彙教育の問題について論じたものに森田良行「語彙」(『国文学解釈と鑑賞』50-3、昭60・3)がある。井上一郎「作文の語彙」(『文教国文学』14・15、昭59・2、9)は小学生六年生の作文の語彙を分析した労作である。同氏の「物語文の語彙——学習基本語彙の基礎的研究——」(『文教国文学』16、昭60・1)とともに、学習基本語彙の選定基準のための基礎資料を得ることが企図されている。小学校児童の作文語彙については、国立国語研究所言語教育研究部「作文使用語彙調査中間報告」5・6(昭59・10、60・12)もある。それぞれ、中学年、高学年の作文語彙表がおさめられている。理解語彙の研究は少ないが、真田信治「理解語彙量の累増過程——ことばの習得をめぐる事例研究——」(『日本語・日本文化研究論集』、昭60・12)は、筆者の長女を対象として一個人の理解語彙量の累増過程の解明をめざしたものの第一報である。小学校就学時より大學生になるまで四年間隔での調査が計画されており、息の長い仕事である。

国立国語研究所「語彙の研究と教育」(上・下)(大蔵省印刷局、昭59・9、60・8)が日本語教育指導参考書シリーズの一環として刊行された。玉村文郎氏の執筆によるもので、広範な視野からの魅力的な参考書の出来である。

宮地裕編「日本語慣用語用例集」(大阪大学文学部、昭60・3)は、現代日本語の慣用語の研究に資するため、現代の小説、随筆、日本語教科書、国語教科書から採集した慣用語の用例を五十音順に配列したもので、見出し二、二四三句、用例延べ一〇、四四八例の膨大な量である。文字通りの労作で、今後この方面の研究の必須文献となろうが、惜しまれるのは、この厚さ三七センチにも及ぶ大冊に、目次、通し頁、用例番号等が無いことである。現代日本語慣用語のデータベースとしての実質をもつだけに利用上の工夫を希望しておきたい。日本語の慣用語は、宮地裕氏が近年、精力的にとり組んでおられる領域の一つと拝察するが、『日本語学』四一一(昭60・1)には氏の編によると思われる慣用語の特集が編まれた。国広哲弥「慣用語論」、村木新次郎「慣用語・機能動詞結合・自由な語結合」、中村明「慣用語と比喩表現」、森田良行「動詞慣用語」、西尾寛弥「形容詞慣用語」、大坪喜子「名詞慣用語——特に隠喩的慣用語について——」、宮地裕「慣用語の周辺——連語・ことわざ・複合語——」、金子百合子「国語教育における慣用語」、阪田雪子「日本語教育における慣用語」の九編からなる構成で、現時点における慣用語研究の水準が一望できる。慣用語は、形態上、意味上、極めてダイナミックな対象であり、分析考察の成果は国語科教育や外国人のための日本語教育に直結することが期待できる分野なので、今後ますます活況を呈する研究領域となろう。

野林正路「言語生活の構造と意味論」(『言語生活』393-395、昭59・9)は、「(認識)と(語義)」、「(認識言語)と(伝達言語)」のダイナミクス」というサブタイトルをもつ意欲の漲つた論考で、読者によいインパクトを与えずにはおかない。ここで野林氏が展開していることは広く深く、単純な要約を許さないが、我々がふつうに「言語」と呼んでいる伝達言語に対する認識言語の一大領域を指定すること、意味論は伝達言語を認識言語へ組織しかつまた認識言語を伝達言語に解体するダイナミクスを説明すべきこと、などが筆者の読み取った要点である。野林氏は背後に哲学をもつ数少ない言語研究者と思うが、一方で、具体的言語記述の精細さにおいても他を圧倒する趣がある。本論でも支持動詞をはじめとしていくつかの対象について行われている意味記述法は、構成意味論と称され、認識言語を可視的に記述する具体的方法を明示している。関連して、同氏に

「山野の思考——(テンブラ)と(フライ)をめぐる認識と語義——」(『応用言語学講座』3 社会言語学の探究、昭60・9)と題する論考がある。この野林氏の構成意味論の方法に追隨していくものとして、今のところ、中林妙子「煮炊動作の認識・語彙体系」(『都立大学方言学会会報』11、昭60・6)や酒井恵美子・梁慧「(煮炊)動作の認識・語彙構造の日中比較」(『国語学会昭和60年秋季大会要旨』、昭60・10)などがあるが、今後の語彙・意味研究の流れの中でどのように継承発展されていくか注視したい。

都立大学日本語研究会「日本語研究」誌上に連載されている「類義語の意味論研究」を紹介することは、すでに本欄の恒例ともなつ

ている。一貫して動詞項目がとりあげられ、今期も同誌6号と7号にあわせて10の動詞グループの意味分析が行われている。また、山本清隆他「意味論研究主要文献の動詞総合索引」(『日本語研究』6、昭59・5)がまとめられた。この研究は、一定の研究の枠組みの中で、多くの若い研究者が、音韻論、文法論にとどまらず、意味分析法の洗礼をも受けている観がして、語彙・意味研究の今後に明るいものを感じさせる。なお、同誌第6号に寄せられた短信欄には、この一連の研究に対する宮島達夫氏や森田良行氏の発言がみられ傾聴すべきものである。

中本正智「火熱に関する動詞語彙——動詞語彙の意味記述法——」(『現代方言学の課題』2、昭59・1)は、当該意味領域の共通語における構造記述の後、それとの対応関係にふれつつ琉球奥武方言の意味記述を行う。諸方言との対応関係にも言及してサブタイトルに示された意図を具体的に展開した。そのほか特定分野の意味論的分析が行われているものに細川英雄「現代日本語の温度形容詞について」(『信州大学教育学部紀要』53、昭60・3)田中佩刀「色名に関する若干の考察」(『明治大学教養論集』17、昭59・3)などがある。

前回の本欄担当の森田良行氏は、「意味論と文法論とが別々に掘り進めて来たトンネルが今、副詞・動詞・形容詞あたりではつぼつ繋がり開通し始めてきた」と指摘しているが、その様相はいちだんと色濃いものになってきた。今期も語の語彙論的特性と統語論的特性とを結び合わせた多くの論考がある。内容にたち入ることは紙幅の制限もあって筆者の能くするところではなく、またその多くのものは文法(現代)でもとりあげられることが期待されるので、論文名を列記するにとどめる。まず副詞では、丹保健一「副詞の意味記述—

「かならず」「きっと」の弁別的意味特徴をめぐる(『国語学研究』24、昭59・12)、北村仁美「様態副詞「ゆつくり(と)」「の意味記述」(同上25、昭60・12)などがある。動詞では、佐伯哲夫「態による動詞分類に向けて——自他と使役そして受動」(『国語語彙史の研究』5、昭59・5)、城田俊「国語動詞の動作相」(『国語国文』54四一七、昭60・7)、斎藤倫明「複合動詞構成要素の意味」(『国語語彙史の研究』5、昭59・5)、同氏「複合動詞後項の接辞化——返すの場合を対象として——」(『国語学』140、昭60・3)、須賀一好「現代語における複合動詞の自・他の形式について」(『静岡女子大学国文研究』17、昭59・3)、福田明子「自他の対応の不規則性について——「ぬける」「ぬく」「ぬかず」を例として——」(『日本語研究』7、昭60・5)、工藤真由美「ノ、コトの使い分けと動詞の種類」(『国文学解釈と鑑賞』50—3、昭60・3)、葛原伊都子「語の多義性について——動詞「かける」の意味分析——」(『日本語学』三十一、昭59・11)、大里泰弘「動詞の意味構造に関して」(『九大言語学研究所報告』5、昭59・3)、宮島達夫「日本語とヨーロッパ語の移動動詞」(『金田一春彦博士古稀記念論文集』第二巻、昭59・2)、奥津敬一郎「授受動詞文の構造——日本語・中国語対照研究の試み——」(同上)などがあり多彩である。形容詞では、小矢野哲夫「形容詞のとる格」(『日本語学』四一三、昭60・3)、などが直接この領域に関わる。語を越えた文節や連語にわたる単位についても、佐治圭三「類義表現分析の一方法——目的を表す言い方を例として——」(『金田一春彦博士古稀記念論文集』前掲)がある。これらの諸研究からもうかがえる通り、意味論・語彙論と文法論との提携は、ますます拍車がかかっていると見えよう。

五

『日本語学』三一九(昭59・9)には語種論が特集され、田中章夫「語種論の課題」、王村文郎「基本語彙と語種」、前田富祺「語種構造の漸移相」、野村雅昭「語種と造語力」、甲斐睦朗「国語教育における語種」というそれぞれ視角からの論考が寄せられている。いずれも量的なデータを考察の柱としているところが共通している。外来語に関しては、まず次の二つの書物が注目される。石綿敏雄『日本語のなかの外国語』(岩波書店、昭60・3)は、日本語の今日的な問題の一つである外来語について平易な文章で語りかけている。長年、外来語研究に携わってきた著者の柔軟な見かたがうかがえる。史群『最新日中外来語辞典』(東方書店、昭60・6)は、現代日本語の中の諸分野にわたる外来語約六万二千語を収録して原語を示し、漢語の訳語をつけたものである。ところで、日本語における外来語の問題は、専ら、欧米をはじめとする諸外国からの影響を蒙るパッシブな現象と考えられてきたと思うのであるが、逆にアクティブな方向に焦点をあてる論考が見られ始めた。李漢燮「現代韓国語に入っている日本語——日本で一部または全部が訓読みされる語を中心として——」(『語文』44、昭59・11)、同「韓国語に入った日本語」(『国語語彙史の研究』6、昭60・10)など。近年、アジア各国からの留学生が大学院に進学するケースがとみに活発で、右のような研究もそのような状況の反映として生まれたものと言えるだろう。『日本語学』四一九(昭60・9)には洋語が特集された。外来語と銘打った雑誌特集にしばしばお目にかかってきただけに、漢語を排除して洋語と対象規定をしているところに新鮮なものを感じた。巻頭論文の鈴木孝夫「洋語の現状

と將來——言語干涉の視点から——につづいて、松岡洸司「日本語の語彙体系の中の洋語——中世末キリシタン書を参考にして——」、上野景福「西洋外語語——その歴史と問題点——」、森岡健二「外来語の派生語彙」、菅野謙「洋語の略語形」、柳洋子・稲垣吉彦「衣生活の洋語」、天沼寧「食生活の洋語」、下河部行輝「住生活の洋語」、蜂谷清人「近世前期文芸作品にみる洋語」の全九編。うち二編は古典語を対象とすることがタイトルに示されているが、考察には必ず通時的な観点が要求されることもこの対象のもつ特質であろう。外来語に関しては他に音声面を考察した澤田田津子「外来語における母音添加について」(国語学)143、昭60・12)があるし、「月刊言語」(二四一九、昭60・9)は「ヨコ文字語総点検」の特集を組んでいる。

擬音語・擬態語に関しては、尾野秀一「日英擬音・擬態語活用辞典」(北星堂書店、昭59・11)がとりわけ注目すべき成果である。類書としてすでに三戸雄一・寛壽雄編「日英対照擬声語(オノマトペ)辞典」(学書房、昭56)があるが、本書は全編文例本位で、見出し語八一四につき豊富な文例が収載されており、外国人に対する日本語教育はもとより、日本人の英語表現のためにも極めて重要な労作と言える。また、あい呼応するかの如く、藤田孝・秋保慎一「和英擬音語・擬態語翻訳辞典」(金星堂、昭59・10)が出ている。従来、日本語に独特と言われてきた擬音語・擬態語も今や対照言語学的な関心に進展しているようで、たとえば徐淑明「日本語の擬声語・擬態語に関する中国語訳の問題点」(国語学研究)25、昭60・12)がある。李永熾「吾輩は猫である」を対象として標題のテーマに挑んだユニークな論考である。

語彙の位相的側面に関して、島田勇雄「語彙総体の構造——位相語彙

への巨視的接近——」(甲南女子大学研究紀要)20、昭59・3)、同氏「位相論の問題(三——文化と語彙体系——)」(解釈)366、昭60・9)など、島田氏の理論的考察がある。記述面では尾高一形「学校のことば」(言語生活)403、昭60・6)、和田昭三「灘の酒屋ことば」(同上)465、昭60・8)がある。

水谷静夫「戦時下流行歌の用語」(計量国語学)14-15、昭59・6)は計量的方法、数量化理論を用いて分析したもの。土屋信一「選挙公報の特徴語の抽出」(計量国語学)15-12、昭60・9)も共出現数と累積使用率から特徴語を抽出する方法を展開している。

友定賢治「育児語の動詞語彙について」(表現研究)41、昭60・3)では、育児語の動詞の分布や分類を踏まえてこの対象の特質が考察された。

南博責任編集「近代庶民生活誌」第三卷(三一書房、昭60・5)は「世相語・風俗語」に当てられ、大正初年から昭和十年代までに発表された「新聞語・隠語・モダン語・皇室敬語・外来語・新語」などに関する文献12点が収録されている。また、樺島忠夫・飛田良文・米川明彦「明治新語俗語辞典」(東京堂出版、昭59・4)は明治から昭和二〇年までに生まれた八〇〇語を収録し、意味・語源・社会背景が解説されている。

日本建築学会民家語彙収録部会編「日本民家語彙集解」(日外アソシエーツ、昭60・10)及び関口武「風の事典」(原書房、昭60・3)は、いずれも千頁に近い大冊で今期の語彙研究の大きな成果に数えられるが、紙幅の都合もあり、方言の欄でとりあげられることを期待してコメントを割愛する。

ここでは、以上にとりあげられなかったもので、重要と考えられる論考を列挙する。まず、語彙・意味研究一般に関わるものとして、奥田靖雄「語彙的なものと文法的なもの」(「ことばの研究・序説」、昭60)、前田富祺「語彙変化と意味関係」(「国語語彙史の研究」五、昭59・5)、小林隆「変化の要因としての語彙体系」(「国語学」24、昭59・12)、安部清哉「国語語彙論の方法について」(「文芸研究」110、昭60・9)、高橋顕志「廃物廃語と無回答(NR)」(「国語学」143、昭60・12)などが、それぞれに理論として刺激されるところが多かった。また、林大「分類語彙集について」(「言語生活」394、昭59・10)は、刊行後二十年を経たという同書にまつわるさまざまなことが、当事者の口から率直に述べられたもので貴重な文章である。市井外喜子「語彙・意味研究の動向」(「現代方言学の課題」2、昭59・1)では、方言に比重があるものの、昭和四十六年頃から約十年間の日本における語彙・意味研究の動向が概観されている。

命名や造語に関する研究も少なくなかった。森岡健二・山口仲美「命名の言語学——ネーミングの諸相——」(東海大学出版会、昭60・9)は類書が少なかっただけに待望の書である。そのほか藤原博「家名」と「個人名」(「学習院大言語共同研究所紀要」6、昭59・3)や佐久間明美「動物名苗字の一考察」(「日本文学論叢」9、昭59・3)がある。森岡健二「形態素論——語基の分類——」(「上智大学国文科紀要」1、昭59・2)は、日本語の語基の体系的分類を試みた重厚な論考であり、語彙論の、とりわけ単位観にも種々示唆を与えられる。石井正彦・野村雅昭「機械工学用語の語種構造」(「計量国語学」14-4、昭59・3)は、

文部省「学術用語集・機械工学編」について語種の観点から結合パターンを分析したもの。他に、斎藤倫明「形態素・単語・語彙素——形態論における単位をめぐって——」(「山手国文論叢」6、昭59・10)、石井正彦「複合動詞の成立——V+Vタイプの場合名詞との比較——」(「日本語学」三十一、昭59・11)、秋元美晴「現代形容詞の語構成の特質(1)」(「緑岡詞林」8、昭59・8)などがある。

最後に、方法論上、印象に残った論考として、形式名詞の意味用法の諸相を分析した篠崎一郎「モノの意味」(Sophia Linguistica 17、昭59)、同氏「ホドの意味」(「言語の世界」3、昭60)、語彙論と文体論との連繋に展望を開く沖裕子「動詞の文体的意味」(「日本語学」四一九、昭60・9)、など民俗意味論の方法を説く平澤洋一「意味の世界と日本語」(桜楓社、昭60・6)、文学作品の主題語彙について論じた神尾暢子「主題語彙の指定方法——川端康成の『伊豆の踊り子』——」(「国語教育学研究誌」8、昭60・9)などがあつたことを付言する。

〈付記〉与えられた紙数を尽くして、なおかなりの文献を残してしまつた。担当者の非力もあつて、取捨・繁簡宜しきを得ない展望となつてゐることを執筆者と読者におわびする。

—— 岡山大学助教 ——